

氏 名	まつ 松 丸 壽 雄
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 531 号
学位授与の日付	平 成 19 年 11 月 26 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	直接知の探求

論文調査委員	(主 査) 教 授 氣 多 雅 子	教 授 藤 田 正 勝	准教授 杉 村 靖 彦
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

現代は自然科学がその絶対とも見える真理性でもって、現代人の知性に支配的な影響力を与えている。だが、自然科学の真理性だけが真理性のすべてであろうか。別の真理性というものは考えられないのであろうか。別の真理性があるとすれば、それは通常の知性によって「知る」ことができるのであろうか。それとも別の仕方「知る」に相当することがなされて、我々はその真理性を確信することができるのであろうか。本論文は、この「別の真理性」を「知る」ことができると仮に考え、この「別の真理性」の内容を「直接知」と名づけて、科学の真理性と対決する形で、真理性の可能性と「直接知」へのアプローチ法を西田幾多郎、西谷啓治、マルティン・ハイデッガー、そして鈴木大拙を手掛りにして探求しようとするものである。

まず、第一章では西田幾多郎の哲学における直接知を明らかにする。

西田の『善の研究』における真理性に二種類のものが考えられるということが、問題の発端となる。「余は最も具体的な経験の事実に近い者が真理であると思う。(中略)真理の極致は種々の方面を綜合する最も具体的な直接の事実その者でなければならぬ。この事実が凡ての真理の本であって、いわゆる真理とはこれより抽象せられ、構成せられた者である。(中略)真の統一はこの直接の事実にあるのである。完全なる真理は個人的であり、現実的である。それ故に完全なる真理は言語に言い表すべき者ではない、いわゆる科学的真理の如きは完全なる真理とはいえないのである」がその問題の文章である。

科学的真理は完全な真理とはいえない。完全なる真理は別の真理として、個人的で、現実的で、言語に言い表せないものであるとされている。論者は、それではこの真理はどのような真理であるのか、という問いを以てその探求の道を始める。

まずは、このような条件に科学的真理性は当て嵌まらないことを確かめた上で、どのような真理性ならば条件に適合するかを問い、宗教的真理性がそれに当て嵌まるのではないかと、そしてまた哲学的真理性も宗教的真理性に基礎づけられている限りでは当て嵌まる可能性があることが示唆された。そして、それを確かめるために、『自覚に於ける直観と反省』期の思索に分け入ることになる。

そこにおいて問題になったのは、一つには極限概念であった。それは経験的には決して到達できない無限に繰り返される操作を意味づけるものであり、理想という意味をもつ。しかし、極限点という理想的点がないとすれば、経験的な行為(それに反省的行為も含まれる)、特に無限に繰り返される行為の意味づけはできないことになる。到達できないはずの点に無限の行為は到達すると「考える」ことができることによって、現在において理想と現実の行為とが非連続の連続として結びつくということを極限概念は意味した。

次に問題になったのは、無限の行為が繰り返されることが単なる同一行為の繰り返しに終わるのではなく、新たな産出をもたらす創造的無限行為が自覚において可能となるということであった。

この二つの問題の根元には、二つのことが共に含み込まれていた。即ち、第一に、非連続の連続という矛盾的事態が實在

の根本的な存在様式に含まれているということと、その構造がどのようなものであるかということとの把握である。第二に、無限に繰り返す自覚の「自己が自己において自己を見る」という行為が創造的であるということが、とりもなおさず、反省という連続的行為と直観という飛躍的でそれ故に非連続とも言える直接知とを自らの内に包み込む証しとなるという考察である。

西田の思索においては、この証しが極限概念と共に無限の考え方によって得られるのではないかという期待のもとに、数学との対決へと導かれてゆく。それと同時に、自然科学の基礎づけということも並行して行うことになる。西田において、自然科学の根源的基礎であり、しかも哲学と自然科学を結びつけるものとして、数学が位置づけられていたようであるが、他方で、哲学は最初から宗教と根源を同じくし、宗教に裏付けられて初めて真理を捉え、表現することができると考えられていた。宗教に裏付けられた哲学が到達し得るのはまさに、科学的真理性とは別の真理性である。ということは、数学はむしろ、この「別の真理性」を哲学に媒介する役割の一端を担い得ると、西田は考えたと解釈できる。この媒介的役割は、特に無限の要素を扱い且つ個々の要素も説明できる集合論に見出すことができ、特に空集合と要素一とが結びつけられるところに見出すことができると、考えられたのである。

このような集合論を始めとする数学との対決を通じて、西田は逆対応という仕方での「別の真理性」と向かい合う可能性を見出した。そもそもこの真理性は宗教において最も直接的に現われ、これを哲学的立場は逆対応という仕方での知の立場においても逆説的に接し得るということが、明らかにされたのである。

第二章では西谷啓治の宗教哲学における直接知を扱う。

直接知とは、与えられた事実を事実そのままに直接に知ることである。それは観察主体が客体のありようを対象として知ることではない。後者は科学には常識ともなっている客観知のあり方の一つである。西谷はこの直接知を歴史的現実との密接な関連の内て扱おうとした。そのことが意味するのは、西谷が現実にした状況から、その世界を自己の思索とその展開の場としたときに、「直接知」の探求と遂行とが自己の実存においてなされなければならないということである。歴史的現実世界が具体的に「虚無の場」から「空の場」へと転換することを自己の実存の上で遂行しなければ、つまり西谷自身が歴史的課題としたものを自己の問題として引き受けられない限りは、宗教哲学者として自己の生を真摯に生きていることにならないと西谷は感じていたと推測されるのである。

西谷は思索の境位を現代という歴史的現実のただ中に見出していた。その歴史的現実の根本は、「宗教の無力化」によって引き起こされたところの、人間の生がその根柢において拠り所を失い、人間の「存在」そのものが無意味化していることだと言ってよいであろう。所謂「ニヒリズム」である。これを軸として、自我中心ないしは人間中心の立場が現出し、生や精神固有の領域が排除され、精神も生命も物質的一元論から捉えようとする自然科学の立場が支配的になっているのが我々の時代における歴史的状況である。この歴史的現在の状況と、それから惹起するさまざまな問題とに対決することが、歴史的現在から課せられた課題であると、西谷は明確な自覚をもつようになったと考えられる。ニヒリズムという歴史的現実が西谷の全期にわたる思索の境位となっていたと言うこともできるであろう。このニヒリズムを自らの宗教哲学が立つ脚下として見据えたものが「空の立場」である。

この「空の立場」において単独者、個別者としての実存が他者とどのように結ばれ得るのか、いわば「切り結び」は如何にして可能となるか、その論理的構造を示したものが「回互的連関」といわれるものであり、単独の実存の単独性、個別性のもとで経験する事実の性格が「頑固な事実」と言われるのである。だが、この頑固な事実の根源は直接的経験が本質的にもつ性格でもあるが故に、直接知の根本性格ともなっているのである。

その直接知は「頑固な事実」の問題として、個人にとってのみ独自の仕方では経験される直接経験をどのようにして「知」という共通性の場へと持ち出すことができるのか、という問いから「空の立場」ということと「回互的連関」という西谷独自の立場が開かれることになる。これはまさに、西谷の宗教哲学において開かれた空の立場から、直接知へと接近するための論理であると同時に、具体的に直接知を経験する場での実践を遂行する手引きともなるものであった。その実践は空の立場とは別物ではないが、「中」の立場という歴史的哲学的探求を通して、言語芸術に向けられることになった。

西田が宗教的真理性と言ったものを西谷は「別の真理性」とも言うが、それは科学的真理とは独立に別に存在する真理という意味ではない。それは、目に見える現象が「無底の場」に裏打ちされて、見えるものが見えざる場において有る、とい

うように二重性において見られるようになることが可能となる場において開かれる真理性なのである。

この無底の場において直接知を具体的に経験する試みを、西谷は独自の仕方では連歌の解釈を通して行おうとした。そのときに着目されたのがimageということである。即ち、「空の立場」即ち「中」の立場から、「情意」という固有の場を開きつつ、「頑固な事実」と一体になって構想力がimageを固有な仕方では働かせる。その構想力が産出するimageの形相性、つまり「理」を手掛りにして、宗教的事実の現状に肉薄するのである。おそらく、このimageを直接的な仕方では感知する、即ち直観するのが芸術であり、宗教的直接表現である。その直接的、直観的の把握に思惟の働きを加えて、理法・ロゴスとして捉えるのが宗教哲学だと考えてよいであろう。それ故に、西谷は芸術と宗教哲学に跨る仕方では、ある意味で哲学的とは言えない、むしろ芸術に直接するような仕事も成し遂げるようになったと考えられる。

それでは、科学に対する西谷の立場はどのようなものであったかということが、次に問題になる。そもそも、科学的な真理の体系は、世界を、したがって自然を支配している法則の客観性に基づいており、この客観性は科学によってのみ確かめられ、科学的方法によってのみより包括的な法則へと展開する。つまり、科学は人間の知識の限界を拓けるものとなると見なされる。自然法則の客観性は何に対しても、何時でも妥当する「普遍性」という側面をもつものと信じられている。この「普遍性」という信念がすべての人々に科学的真理を唯一の真理体系として受け入れることを暗黙に求めるということになるのであろう。この科学の絶対的とも見える真理性の前に、現代の宗教と哲学は自らの真理性が屈していると感じ取っているようである。その原因は、宗教と哲学が目的論をその根幹に据えてきたからである。だが、ありのままを底なき場として引き受ける西谷の宗教哲学の立場は、科学的真理性の裏打ちをしているものとして「別の真理性」を直接経験できる道を見出したのである。

第三章では、ハイデッガーの思索のなかに直接知への接近を見て取るとともに、鈴木大拙の禅における直接知を明らかにする。

「直接知」の可能性はこれまで見たところでは、西田、西谷という東洋の思想家が探求してきたものである。それ故、直接知は東洋に限られた特殊な知の形態であると見られる可能性がある。そこで、現代西洋の代表的思想家であるハイデッガーの言葉に関する思索を通して、ハイデッガーも直接知を求めていたことをまず『言葉への途上』を中心とする著作から明らかにすることができる。即ち、ハイデッガーは詩の解明を通じて、ことばの現成そのものに遡ろうとし、そこに思索と詩作との同根の場所を見、且つそこから根本経験をことばにもたらしことへと転じていこうとするものである。この根本経験は直接知に他ならない。ハイデッガーは純粹にギリシア的基盤に立ちながら思索を進めているから、根源的西洋の思索にも直接知への探求を認めることができる。但しその特徴は、直接経験から「半歩」の間において思索を遂行するというものであった。

しかしながら、ハイデッガーはこの西洋の思索の根源であるギリシア的なものに立ちながらも、同時に禅からの影響も考えられる。それは西谷、鈴木大拙との交流を通して、そしてまた手塚富雄との対話を通して、直接知への考えに影響を受けたという点も否めない。

ここから論者は、彼らの思索の根源となっていた禅に考察を進める。禅における直接知は、鈴木大拙がはっきりと言い切っているように「悟り」において見いだされるものである。だが従来より、「悟り」はまったく直観的あるいは直感的なものであり、知性の一切の接近を拒絶するものである、という主張がなされてきた。しかしながら、「悟り」が知的な側面は一切削ぎ落とされた、経験だけの事柄である、と言ってしまうならば、禅の師匠たちによる膨大な禅語録は無意味な知的表現の反故に過ぎないということになってしまう。

このことに関しても大拙ははっきりと言う。「全体作用」という一体化した禅経験も禅意識が伴わない限り、一時の経験に過ぎず、それを「悟り」とは言えない。「悟り」は「表詮」という言葉へと出る禅意識の働きを伴って初めて一時的体験から禅体験として本来の働きが発揮されてくる。これまで、西田、西谷、そしてハイデッガーが思索の立場から直接知を求めてきた営みはすべて、この大拙の確言により禅意識を伴った全体作用を究めようとしてきた行いであったとして位置付けられることになるのである。そしてまた、「半歩」の「退歩」は、この禅意識の働きが全体作用に沿うために不可欠の要素であったこともはっきりしてきたのである。

以上の考察から、第四章において結論が導きだされる。

第一章から第三章の論考を通して、西田、西谷、鈴木の三者において、いわば互いが互いを補う仕方一つ一つのまとまりの働きの中にあることが取り出され得る。これを名付けて、三者による三部作、つまりトリロジーと見ることが可能である、と論者は結論づける。

論文審査の結果の要旨

本論文は、西田幾多郎、西谷啓治、マルティン・ハイデッガー、鈴木大拙の思想の考察を通して、「直接知」の可能性とそれへのアプローチ法を探索しようとしたものである。「直接知」という言葉は西谷の論文から取ったものであり、論者はこの言葉を、西田、西谷、ハイデッガー、大拙の思索における共通の目標を表すキーワードとして用いている。西谷によれば、「直接知」とは「与えられた事実をその事実として直接に知る」という知のあり方であって、そこから「その直接知を離れて論理的な知解へ進む」方向と「その直接知そのものをそのまま深めていく」方向という二つの方向が出てくる。後者の方向の探求を明らかにすることが、論者の意図である。

本論文の構成では西田に関する考察が第一章、西谷に関する考察が第二章になっているが、「直接知」という語が西谷に拠るように、論者は、直接知の探求と遂行が典型的に見出されるのは西谷においてであると考えている。その西谷に先行し、哲学における直接知の探求の端緒となったものが、西田の場所的論理をめぐる思索であると捉えている。そして、鈴木大拙の禅思想を手掛りとして、所謂「悟り」という禅における根本経験のなかに直接知と見なし得るものがあることを明らかにし、具体的経験という局面で直接知の可能性を確認する。そしてさらに、ハイデッガーの言葉をめぐる思索のなかに禅と通じるような直接知への接近を読み取り、直接知の探求が東洋の伝統にのみ見出されるわけではなく、普遍的なものであることを示唆する。本論文は内容的に、以上のような構造をもっている。

本論文の特徴は何よりも、「直接知」という知のあり方を真っ向から主題に据え、それを含むものとして禅の「悟り」をも哲学的に考察しようとするところにある。西田哲学の基礎に禅の経験があるということは誰もが指摘することであるが、純粹経験や場所の論理といった西田の思想と禅の経験との関係は大きな問題を孕んでいる。西田哲学は禅経験を哲学化したものであり、したがって本来の意味での哲学ではない、という見方を取る研究者は少なくない。悟りという特別の宗教的経験なしに西田哲学は理解できないと見なされるならば、西田哲学は哲学的思索の場から追い出されることになるであろう。だが、逆の考え方も可能である。つまり、もし「直接知」という知のあり方が可能であるとするなら、何故に知を愛し求める営みであるところの哲学がそれを問わずに済まされるのか。現代哲学の潮流のなかで「直接知」を一般に哲学の課題とすることに異議を唱える者がいるとしても、「宗教哲学」という立場を掲げて、「直接知」をその宗教哲学の課題とすることには異論の出る余地は無いであろう。

論者はこの事象を宗教的真理と科学的真理との対比のなかで考察しており、「直接知」という概念によって、禅仏教の伝統のなかで伝えられてきた「悟り」に含まれている知の側面を宗教哲学の論考の場に載せようと目論むのである。その目論みは非常に難しいものである。その理由は、一つには、西田の場所的論理や西谷の空の思想についての深い理解と、禅経験の確かな把握を必要とするからであるが、それだけでなく、論者自身が直接知の探求に参与しながら、しかも直接知の探求に呑み込まれてしまわない適確な位置取りをする必要があるからである。西田、西谷、大拙、ハイデッガーの直接知に対する位置取りを論者は「半歩退歩」として論じているが、それは論者自身の位置取りでもある。このような困難な目論みを行ったこと自体が、まず高く評価されてしかるべきである。

さらに、特筆すべき本論文の成果が二つある。

一つは、西田の最晩年における宗教論の根本概念である「逆対応」が、数学の集合論を哲学的に基礎づけようとした論考と密接な関係があることを解明した点である。西田は、集合論における零集合（空集合）と集合の要素との関連を論ずる過程で、要素と要素との一対一対応関係の成り立つ下に、それらの要素の「於てある場所」として零集合が働いているということを論ずるなかで「逆対応」という言葉を初めて用いている。その議論から、個が個に対して逆対応することによって場所の自己限定が成立するものと考えようになり、そこからさらに、絶対者と個物的人間の間に成り立つところの宗教的な逆対応の概念が導き出されていくことを、論者は詳細に跡付けた。その議論は説得力に富んでいるとともに、論者の場所的論理についての深い理解を存分に展開したものになっている。

もう一つは、西谷の「回互的關係」と「頑固な事実」という概念をめぐって卓越した洞察を示した点である。論者は西谷の叙述に基づき、事実の現成において、事実が知へと出て行く方向と知から離脱する方向があることを見て取るのであるが、「頑固な事実」の「不回互」というあり方に知から離脱する方向を読み取る。そして、その頑固な事実が、頑固なままで、世界において「ところ」を得て「有る」、という形で事実は現成するのであり、その現成において、事実はイメージとして自らを知らしめてくると解する。それが詩歌に現れる直接知だというのである。これは直接知という概念を中心に据えたことで可能となった、明快な解釈である。

このように優れた内容をもつ本論文にもいくつか問題点が見出される。一つは、西田や西谷の思想に一步でも肉薄しようとする思索の努力をあくまで貫いたことで、先行研究についての検討がややおろそかになっている点である。もう一つは、宗教的真理に対置される科学的真理についての考察にもっと現代的な視点が加えられるべきであったという点である。しかし、これらの問題点は本論文の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。2007年7月26日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。